

ねん がつ にち
2020年3月22日
しじゅんせつだいよんしゅじつ
四旬節第四主日
きくち いさおだいしきょう せつきょう
菊地 功 大司教 ミサ説教

わたしたちは、厳しい挑戦を受け続けながら、今年ことしの四旬節しじゅんせつを過すごし
ております。教会きょうかいの歴史れきしの中なかでは初はじめてではないのだらうと思おもいますが、
しかし、私わたしを含ふくめて多くおほの方が、信仰生活しんこうせいかつの中なかでこれまでに体たい験けん
したことじたいのない事そうぐう態こんわくに遭あいひまわられ、困こま惑わくしています。

四旬節しじゅんせつは、洗礼せんれいの最終さいしゅうてき的な準備じゅんびをしている洗礼志願者せんれいしがんしゃと歩あゆみを
ともにしながら、キリストしたがに従したがうわたしたちが、信仰しんこうを振り返かえり、イエス
との出会いであの原点げんてんに立ち返かえろうとする季節きせつです。感染症かんせんしょうの拡大かくだいが要因よういん
とはいえ、その四旬節中しじゅんせつちゅうにミサにあずかることができず、また御聖体ごせいたい
のうちげんそんに現存しゅされる主いっとの一致きかいの機会れいてきも霊はいりょう的な拝領げんていに限定もくされ、黙
想会そうかいなどを通つうじて信仰しんこうを見つめ直みす機会なおもなくなってしまうことは、
わたし自身じしん非ひ常じょうに残念ざんねんですし、教区きょうくに対してそのような判断たいをせざる
を得えなかつたものとして大變心たいへん苦くるしく思おもっています。

もちろんミサがないことだけで、わたしたちの教会きょうかい共き同き体たいが崩壊ほうかいして
しまったわけではありません。この危機きき的な状じょう況きょうに直ちよく面めんする中なかで、
あらためて、わたしたちは信仰しんこうによって結むすばれている兄弟姉妹きょうだいなのだと
いう意識いしきを、さらにはわたしたちは共に、同じキリストともの体おなを形からだ作かたちづって
いるのだと言う意識いしきを、心こころに刻きざんでいただければと思おもいます。

祈いのりのきずなによって結むすばれて、共に困難ともに立ち向こんなんかう兄弟姉妹たとし
て信仰しんこうの内うちに連帯れんたいしながら、この暗闇くらやみの中なかで、いのちの源みなもとであるキ
リストの光ひかりを輝かがやかせましょう。

わたしたちは、^{くらやみ なか と のこ}暗闇の中に^{ひとり しんこう}取り残されて、一人で^{かみ あた たまもの}信仰をまもろうとして
いるのではありません。わたしたちは、^{とも い}神から^{ぶつりてき はな}与えられた^{みな あつ}賜物であるの
ちを共に生きてるように、^{こんなん}物理的に^{おな しんこう うち}離れていても、たとえ^{とも いの}皆が集まるこ
とに^{いっ}困難があつたとしても、^{しよ}同じ^{ちから あ}信仰の^{しんこう}内にあつて共に^{いっ}祈ることで、一
緒になつて^{しよ}力を^{ちから あ}合わせて^{しんこう}信仰をまもっています。

パウロはエフェソの^{きょうかい}教会への^{てがみ なか}手紙の中で、わたしたち一人^{ひとり}ひとりに、^{おも}主
に^{むす ひかり こ}結ばれて「^{あゆ}光の子として^よ歩みなさい」と呼びかけます。その「^{ひかり}光から、
^{ぜんい せいぎ しんじつ しょう}あらゆる善意と正義と真実とが^{しる}生じる」と記されています。

わたしたちは、^{くらやみ なか}暗闇の中で^{ぎしんあんき}疑心暗鬼に^{さいな}苛まれて^{しゃかい}いる社会にあつて、キ
リストの^{ひかり かがや}光を^{ぜんい せいぎ しんじつ しょう}輝かせ、「^{つと}善意と正義と真実」を生じさせるように^{おも}努
めたいと思います。

パウロは同じ^{おな}手紙の中で、わたしたちが^{てがみ なか}光の子として^{ひかり こ}先に^{さき ひかり かがや}光を輝か
せるのではなく、^てまず「^{しる}キリストはあなたを照らされる」と記しています。
しかし、^{じょうけん}そのためには^{しる}条件があるとも^{ことば}記されています。それはその^{ことば}言葉
の^{ちよくぜん}直前に^{ねむ}ある、「^{もの お}眠りについて^{ししゃ なか}いる者、^{た あ}起きよ。死者の中から^あ立ち上
れ」という^い言葉に^{ことば しめ}示されています。

わたしたちは^{ひかり}キリストからの^て光の^う照らしを^{た あ}受けたから^あ立ち上がる^あことができ
るのでなく、わたしたちが、^{た あ}立ち上がる^{けっか}からこそ、そこに^{ひかり}結果として
キリストの^{ひかり}光が^て照らされるのだ、^{ひかり}ということです。すなわち、わたしたちが^{ひかり}光
の子として^{こ かがや}輝くためには、^{ひかり}キリストからの^て光の^{ひつよう}照らしが^{ひつよう}必要であつて、
その^て照らしを^う受けるためには、^{しゅたいてき こうどう}わたしたちの^{しゅたいてき}主体的な^{こうどう}行動が^{しゅたいてき}まずなければ
ならないのです。

ヨハネの^{ふくいん}福音では、^{いけ い}シロアムの^{もうじん はなし}池で^{しる}癒やされた^{しる}盲人の^{しる}話が^{しる}記されていま

す。もちろん冒頭で、イエスは土をこねて盲人の目に塗るのですが、そこで本人の行動を促します。

「シロアムの池に行って洗いなさい」

盲人は自ら行動することによって、癒やしをえるというキリストの光に照らされることになるのです。そして、さらには、福音には、「帰ってきた」と記されています。すなわち、キリストに導かれながら自ら行動したことによって光に照らされた盲人は、その光の源であるキリストから離れることはなかった、キリストの光の内にとどまったということです。

その一連の行動を、律法の規程に背いているとして咎め立てるファリサイ派の人たちは、キリスト光の内にとどまることのない人の姿を現しています。

自らの常識やプライドにがんじがらめにされているため、目の前で起こっている事実を、自分の世界の枠組みの中でしか理解することがありません。その目には、キリストの光は届いていないのです。

福音の中では、ファリサイ派の人たちとイエスとの立ち位置の違いが象徴的に描かれています。イエスは外に立っている者として描かれ、ファリサイ派の人たちは自分たちの場所の中にとどまっているように描かれています。目の不自由な人は、翻弄されながら、その間を行き来していません。

キリストの光は、自分たちの殻に閉じこもり、常識とプライドの中にあんじゅうもとなかひととど安住を求めている中の人たちには届いていません。そこには、善意と

せいぎ しんじつ か
正義と真実が欠けてしまっているのです。

とはいえ、ファリサイ派の人たちが、取り立てて悪人であると断罪すること
とは、わたしたちにはできません。なぜならそこに描かれている姿は、わ
たしたちそのものでもあるからです。わたしたちは、個人としても共
同体として、自分の思いや社会の常識や長年の伝統やプライドを優先
させて、時としてそれを守ることに力を傾けてはいないでしょうか。

せつぎよくてき でむ きょうかい すがた と つづ きょうこう
積極的に出向いていく教会の姿を説き続ける教皇フランシスコ
は、今年の四旬節メッセージにこう記しています。

しゅ かいしん じき ほうほう つかさど じぶん おも ちが
「主への回心の時期や方法を司るのは自分だといううぬぼれた思い違
いで、この恵みの時を無駄に過ごすことのないようにしましょう」

うえ きょうこう たみ あ の みちび
その上で教皇は、「イスラエルの民のように荒れ野に導かれましょう。
そうすれば、花婿であるかたの声を ついに聞き、その声を心のうちで、
より深く意欲をもって響かせることができるでしょう。そのかたのことばに
すすんで関わればそれだけ、わたしたちに無償で与えられる主のいつくし
みをますます味わえるようになります」と述べています。

きょうこう しじゅんせつ しる
さらに教皇は四旬節メッセージにこう記します。

「イエスにおいて、神の熱意は、ご自分の独り子にわたしたちのすべての罪
を負わせるほどに、また教皇ベネディクト十六世が述べたように、「自
らに逆らう神のわざ」となるほどまでに高まります。神はまさに、ご自分
の敵さえも愛しておられるのです」

たびじ しゅやく ひかり あい
わたしたちの旅路の主役は、光であるキリストです。わたしたちを愛す

るがあまり、先頭せんとうに立たって十じゅう字じ架かを背せ負おい、わたしたちを導みちびいてくださ
るキリストです。自分じぶんという殻からを打うち破やぶって外そとへと出で向むき、行こう動どうするよう
に促うながすキリストです。

わたしたちはこのキリストに、ひとりしたがでつき従したがうのではなくて、神かみの民たみと
して、共きょう同どう体たいとしてつき従したがっています。それは光ひかりの子ことして、わたし
たち一人ひとりひとりが、そして共きょう同どう体たい全ぜん体たいが、この世界せかいに「あらゆる善ぜん意い
と正せい義ぎと真しん実じつ」を生しょうじさせるためであります。神かみが求もとめられる世界せかいを
実あら現わし、神かみの聲こえに身みをゆだね、神かみの愛あいを分わかち合あうために行こう動どうする
共きょう同どう体たいとなるためであります。

困難こんなんな状じょう況きょうの中なかにあつて、互たがいに祈いのりの内うちに結むすばれて、キリストを証あか
ししていく者ものとなることができるように、招まねかれる主おもに従したがって一いっ歩ぽ先さきへ
と歩あゆみ続つづけたいと思おもいます。